



# 令和2年度全国景観会議全体研修会

～ 高知県四万十市 ～

茨城県土木部都市局都市計画課 技師 清水 雅也

令和2年10月22日及び23日の2日間にかけて、令和2年度全国景観会議全体研修会が高知県四万十市で開催され、全国から景観行政に携わる関係者が集まり、基調講演や現地視察などが行われました。



四万十川沿川の景観デザインの基準となる「四万十川景観計画」は、四万十川の自然と地域の営みが創り出す景観が国の重要文化的景観に選定されることを契機に平成20年に策定されました。具体的な内容としては、建築物の屋根・外壁等の色彩を抑えることで周囲の景観と調和させること、ガードレールを白色から茶色に変更すること（自然界に「白」は少なく目立ってしまうため）、連続する山の稜線を分断しないこと、四万十川の特徴である蛇行する河川景観を阻害しないこと（道路・ガードレール等を直線ではなく緩やかなカーブにしたり、橋脚を四角柱ではなく円柱にする）などについて説明・解説がありました。

## ■ 研修会1日目

基調講演：高知工科大学 教授 重山 陽一郎氏

題 目：「四万十川沿川の景観デザイン」

四国地方は四国山地などの山地が広がっており、平野部が少なく、高知県の森林率は約84%と全国1位の割合になります（全国平均は67%、茨城県は31%）。

また、高知県は降水量も全国1位（年約2,500mm）で、河川の増水を受け流すために、沈下橋（欄干がなく増水時には水に沈む）が各所にみられるとのこと。



岩間沈下橋（10/23撮影、前日の降雨で橋桁近くまで増水）

四万十川流域では、漁労・遊び・祭事など川との様々な関わりが息づいており、四万十市は平成17年に4月10日に中村市と西土佐村が合併することで誕生しました（合併日である「4月10日」は平成元年に「四万十の日」と定められたそうです）。

講演：高知工業高等専門学校 准教授 北山 めぐみ氏

題目：「四万十市のまちなか地域資源」

四万十市役所のある中村地区は「土佐の小京都」と呼ばれています。室町時代に関白一條教房が応仁の乱を避けるため、ここ中村に御所を構え、京都を模した碁盤の目状の街づくりをしたことに起源があります。

昭和21年の南海大地震で昔ながらの街並みの多くが失われてしまいましたが、碁盤目状の街並みが残されているほか、昭和20年代の土地区画整理事業によって行われた「隅切り（土地の角を削って道路にすること）」が残されており、交差点の中心に向かって入口が設けられている店舗が市内の各所にみられるとのこと。

## 四万十市まちなか地域資源調査（市内視察）

笹岡旅館：現在も営業している築80年以上の木造・真壁造（柱を隠さずに見せる伝統工法）の旅館で、1階が住居、2階が客室になっています。

玄関には四万十川で取れた石が敷き詰められており、この石を見るために泊まりに来る人もいるとのこと。ほかにも染物店及び醤油店の視察を行いました。





## ■ 研修会2日目

### 現地視察：岩間沈下橋（写真は前ページを参照）

平成29年11月に発生した橋脚の沈下対策として、平成30年3月に橋脚内へのグラウト充填を行い、令和元年11月から補修工事を施工しています。研修会が行われた令和2年10月時点では、橋脚部を掘削して水中調査を行っており、新たな損傷が確認されなければ、令和3年4月から供用予定とのことです。

総事業費は約2億6千万円であり、橋を架け替えた方が事業費を抑えることができましたが、平成21年に四万十川流域が文化庁の「四万十川流域の文化的景観下流域のなりわいと流通・往来」に選定され、岩間沈下橋も「重要文化的景観の重要な構成要素」となっていたため、検討会で復旧方法の協議等を行い、補修工事に対応したとのことです。

### 現地視察：ゆすはらちよう 梶原町の街並み景観形成の取組

梶原町は高知県の北西部、高知市から車で約90分の位置にあります。愛媛県との県境には日本の三大カルストの1つである四国カルストが広がっており、四万十川の源流域が位置しています。また、標高約1,400mにある四国カルスト県立自然公園からカルスト高原を一望でき、梶原町が「雲の上の町」と呼ばれる由縁になっているそうです（本研修会で四国カルストの視察はありませんでした）。



「ゆすはら座」の外観・天井写真

昭和23年に町内に建設された木造の芝居小屋では、歌舞伎などが行われ「梶原公民館」として親しまれていましたが、老朽化等の問題から昭和62年に取壊し案が出ました。しかし、天井などの木目が美しく、貴重な建物であることから取壊しを惜しむ声が上がリ、平成6年に町保護有形文化財に登録、平成7年に現在の場所（町役場北東）に移築して保存することになりました。この移築を機に、新名称を募集し「ゆすはら座」へと改称しました。この「ゆすはら座」の保存活動を通じて、梶原町は新国立競技場を設計した建築家の隈 研吾氏と出会いました。



「雲の上の図書館」の外観・内装写真

その後、平成6年から平成30年までの間に、梶原町総合庁舎、まちの駅、複合福祉施設など隈 研吾氏の設計した6つの建築物が町内に建てられました。

平成30年に落成した「雲の上の図書館（町立図書館）」は周囲の山々との調和を図るために、屋根に高低差をつけているとのことです。また、図書館の内部や本棚には県産の木材が使われています。

## おわりに

今回の研修会を通じて、地域の歴史と資源を活用した景観計画及びまちづくりの実例を知ることができ、大変有意義な研修となりました。

また、沈下橋の空撮動画はYouTubeで視聴可能なので、興味のある方は是非、視聴してみてください！